

第12期 社会教育委員の会議（第10回） 会議録

● 開催日時 令和2年10月23日（金） 午後2時～4時

● 会 場 702 会議室

● 出席者

社会教育委員 （6人）

大島 英樹	野川 春夫
竹高 京子	長峰 政子
鈴木 弥生	熊谷 晴弘

事務局職員 （4人）

葛飾区教育委員会事務局参事、生涯学習課長	加納 清幸
生涯学習課学び支援係長	伊藤 清美
生涯学習課学び支援係（社会教育主事）	与儀 睦美
生涯学習課学び支援係	金子 亜希子

オブザーバー （2人）

生涯スポーツ課長	南部 剛
生涯スポーツ課事業係長	張替 武雄

出席者 計12人

次第

議事

- 1 新型コロナウイルス感染症の、スポーツ・文化活動や社会教育活動への影響
- 2 「新しい社会」をどう見るか
- 3 今後の会議の進め方
- 4 教育委員との懇談会の進め方
- 5 その他

【配付資料】

- 第9回会議会議録（案）
- 長峰委員提供資料〔資料1〕
- 大島議長提供資料〔資料2〕
- 第12期社会教育委員の会議スケジュール（案）〔資料3〕
- 教育委員との懇談会の進め方（案）〔資料4〕
- 社教連会報 No. 87
- まなびぷらす Vol. 28
- 関連事業チラシ（区民文化祭、共栄大学公開講座、秋の読書週間、パラスポーツを学ぶ、生と性のおはなし講座(2)、柴又・水元紅葉ウォーキング、スポーツカメラマン、さつまいもの和洋菓子作り）

— 開会 —

○事務局 ただいまから第10回社会教育委員の会議を開催します。

本日、大畑委員より欠席のご連絡をいただいています。

本日、傍聴者が1人いらっしゃいます。傍聴者にご入場いただきます。

(傍聴者入場)

○事務局 まず、本日の資料についてご説明いたします。

第9回の会議録の案ですが、昨日までにいただいたご指摘を反映したものを、机上に置かせていただいております。訂正がございましたら、本日の会議終了までにお聞きしたいと思います。修正を反映した確定版を、来週中にホームページへアップしますので、ご確認いただければと思います。

資料1は、前回、長峰委員から当日配付していただいた資料です。本日の議題の内容に関わっておりますので、改めてもう一度配付させていただきました。

資料2は、大島議長からの提供資料でございます。

資料3は、今後のスケジュール案でございます。

資料4は、12月25日に予定しております教育委員と社会教育委員との懇談会についての案でございます。

関連資料としまして、全国社会教育委員連合から送られてまいりました社教連会報、生涯学習課作成のかつしか区民大学情報誌「まなびぶらす」、皆様に補助金の審議をしていただいている文化協会主催の市民文化祭のご案内、そのほか色々な事業のチラシを机上に置かせていただきました。資料は以上です。

この後の進行は、大島議長にお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

○大島議長 皆さん、ご無沙汰いたしまして。先月は体調を崩し、欠席をしてしまい申し訳ありませんでした。会議録を読ませていただきました。この間のことについて、非常にたくさんお話しいただきまして、いられなかったことを申し訳なく思います。この変化、影響で体調を崩したというようなところもありまして、自分の話も後々できればと思います。

議事に入る前に、前回、生涯学習課長から、来期も引き続きという提案をいただいたと思いますが、改めて、委員の皆様、引き続きご協力いただければと思います。色々なご事情もおありと思いますが、お願いしたいと思います。

議事

1 新型コロナウイルス感染症の、スポーツ・文化活動や社会教育活動への影響

○大島議長 では早速、議事の1番から入っていきたいと思います。先月たくさんご意見をいただいた「新型コロナウイルス感染症の、スポーツ・文化活動や社会教育活動への影響」というこ

とで、色々な方面に影響があったことを読ませていただきましたが、その後、さらにこのひと月で、何か変化があった、ということがあれば、そこから伺いたいと思います。どなたか身近なところでおありでしょうか。長峰委員からお願いいたします。

○長峰委員 資料にありますように、スポーツ推進委員の常任委員会がこのように行われました。この後 10 月 3 日の常任委員会に出席した 1 人が新型コロナウイルス陽性と判明し、出席者全員が自宅待機となったため、常任委員は 10 月 11 日のスポーツフェスティバルに参加できなくなってしまったのですが、残ったスポーツ推進委員と行政の方たちで何とか体力テストを行いました。

参加者は当初 100 名の予定でしたが、天候の関係もあり 60 名程度だったようです。混乱もなく無事に終了しました。また、PCR 検査で全員陰性ということが判明して本当にほっとしております。

10 月 21 日の定例会も中止になっております。

11 月 4 日に常任委員会がありますが、そちらは常任委員 14 名中 8 名で今後の活動についても一度見直していこうということになりました。

○大島議長 ありがとうございます。定例的な会議を催したことで、関係者に感染の疑いが広がったのですね。常任委員の方が全員自宅待機になってしまったけれども、その代わりに推進委員のほうでスポーツフェスティバルは実行できたということですね。

○長峰委員 そうですね。しっかり研修を行っておりますので、きちんとできたようです。

○大島議長 それは、裾野の広がりがあるからこそですね。そのまま常任委員が全部やる予定でしたら止まってしまうということだと思います。ありがとうございます。長峰委員、ご発言、ご質問等よろしいでしょうか。

では、ほかの方々のところ、このひと月、その後の変化は何かございましたでしょうか。やはり春先から数カ月の間というのが大きかったのだなというのを前回の記録でも読ませていただきました。このひと月は、少しずつ安定してくるのか、良くなってくるのか、いろいろな要素が混ざっているところだと思います。

そうすると、その影響はまたいろいろな形でお話いただくということで、次の議事へ進みたいと思います。

2 「新しい社会」をどう見るか

○大島議長 次第の 2 番目、「新しい社会」をどう見るか、というところで、少し角度を変えてご意見を賜ればと思います。

お手元の資料 2 をご覧ください。簡単なものですが、用意しました。「「新しい社会」をどう見るか～議論のたたき台に～」ということで出させていただきましたが、前回の会議録を読ませ

ていただくと、変化ということで本当にたくさんご発言いただいたのがよく分かって、それを、「新しい」という言葉だけではなく、一体どこが新しいのかを整理していく必要があると思って、「変わらないこと」あるいは「変わったこと・変わること」という形で分けてみました。そうしたら、「変わらないこと」というのは、スポーツへの欲求であったり、学びへの欲求であったり、人と触れ合うことへの欲求であったり、そういう、人間として生きてゆくベースとなるものは、環境がどうであれ出てくるものだということを、改めてご発言の中から感じたところです。

それに対して2番目の「変わったこと・変わること」というのは、よくもこんな短期間にいろいろなことが出てきたなと思いますけれども、基準や、何が適正なのかという物の考え方が新たに示されてきた。ソーシャルディスタンスは2メートルと言いますが、今はもう手を繋げる距離だっというとかというようなことを急に出されて、それが新しい生活の基準だと言われたり、定員という話もたくさん出ていましたが、同じ空間が違う使われ方、使い方をせざるを得なくなったり、というようなことがあったかと思います。

それから、計画・予定ということに関しては、特に学校が分かりやすいところですが、1年間の計画があったところをいきなり2カ月停止するという中で、どう組み替えていくのか。計画というものでさえ、予定さえ変わっていくのだということが改めて浮かんできたところです。

そういうふうに予定を変えていくにあたっては、優先順位をつけないことには何も進まないというご意見が出ていたと思います。優先順位ということは、場合によっては、どこか諦めるということにもつながります。これまでの行政の取組の中では、やめるとか、なしにするとかいうのは言いにくいことだったと思いますが、その辺、今回の会議の中で大事な検討事項ではないかと思っています。

そして、「変わったこと・変わること」の4つ目、インフラについては、インターネット環境がこれからの生活にとって当たり前になるということが、多くの委員の皆さんからのご発言にありました。全面的にそれに依存するという考え方ではなく、ICTというのは以前ここでもお話したと思います。ITというとコンピューターの使い方に偏るような言葉遣いですが、でも、「C」を入れる、コミュニケーションのツールだとするならば、そもそも難しいから使えないというのではなく、やりたいことがあるためにこの道具を使うのだという考えからこの変化というものを受け入れていくということが必要なのかなと思います。そんなことから、到達目標と達成までのプロセスの組み直しというようなことを考えていけたらいいのかな、あるいはそういうことが変わっていくのじゃないかというふうに、前回の記録を読んで感じました。

そんな見方を踏まえて、項目の2番目、「先を見て、大胆な予測を！」という題をつけたのですが、この言葉は前回の会議録の最後のほうに野川先生の言葉として載っているところです。この会議の役割は、1つの事態を踏まえた提言を出していくことなので、まさに、この大胆な予測をしていくことが大事なのかなと思っていて、そのときの教訓からできる限り時

間を取っていろいろなご意見をいただきたいと思いますが、振り返っていただくのに鍵となるような幾つかの印象に残ったご発言を抜き出しておきました。

1つ目、「新しい環境の中での地域活動とは？」というのは、大畑委員からのお話だったと思います。

それから、「今やるべきこと、やらなくてもいいこと」を区別しよう、というのは竹高委員のご発言でした。

「取組の価値をきちんと考える」というのもありました。

そして、「行政が、しなければいけないこと」、これはちょっと僕が意識してしまったものですが、こういったご意見があったと思います。

そして「頼りになる人に『出番』を」、表現は変わっていますが、野川副議長からですね。いろいろな得意技を持っている方がいらっしゃる。そういう方にもっと活躍してもらえたらいいのではないかと。僕の日常的な言葉で、「出番」という言葉を、教育の世界では使うのですが、そういう聞き取り方をしたらどうだろうと思いました。

最後は、そうしたいろいろなご発言を踏まえての僕の感想から生まれたものですが、「知恵の伝達（共有）と発信」ということが、行政の社会教育という視点から見たときに、いろいろ考えられるところなのではないかと思いました。例えば縄跳びだって、「こうやって遊んだらいいよ」と知恵を持っている方がどう発信するか。人を集めて発信してもいいし、それこそ動画に上げてもいいし、そういういろいろなものを持っている人たちをよく知っているのは、まさに行政の立ち位置にもあると思うし、そう考えると、こうした状況の中でやれることをいろいろ考えてみられるのじゃないかなと思います。

そんな形で最後のところ、「理想を語る『契機』に」と書きました。もともと今期の委員の協議テーマは、オリンピック・パラリンピックを契機に、ということでしたが、それを含めてこの社会の変化を語る、将来を見据えて語る契機になればいいのかなと思い、このまとめをしてきたところです。前回、その場になかった人間が書いた勝手な感想文なので、そういう意味ではないぞというようなところを含めて、自由なご発言をいただいて、それをまとめていくという形がとれたらいいのではないかと思います。いかがでしょう。まず、読み取りとか聞き取りに対して、そういうつもりでないのだけど、ということをお話いただけたらと思います。

○竹高委員 質問です。前回、生涯学習課長から、もう1期このメンバーでというお話がありましたが、今、議長からお話があったように、テーマとして掲げていたものが、今もうすっかりひっくり返ってしまっている。まず土台から、私たちはもう1期やるのだとすれば、どこに視点を持って、何をテーマとしてやるのかということ、きちんと立て直すのがまず第一歩なのかと思っています。それにオリンピック・パラリンピックのことが入るのだとすれば、それをどういう形で組み込んでいくのか。今の時点では、来年できるという仮定のもとに進んでいます。

れども、最悪の場合はできなくなる可能性もある。そうなった場合、私たちがテーマとして掲げているものが中心になってしまうと、また違った形になってしまうので、それも踏まえたところで、きちんとしたテーマで次の期につなげるような勉強を今していかなきゃいけないのかなと思います。すごくもやもやしているものがあって、すっきりしないような感じがして、前回もちょっとお話したのですが。

○大島議長 そのこのところは、生涯学習課としてはどんな構えでいらっしゃいますか。

○生涯学習課長 現時点では、これまでお願いしたテーマで進めたいと思っているのですが、私自身、いかななものかなというものがあって。今、コロナ騒動といますか、きっと我々しか体験していないことであって、社会教育委員の会議の中でもテーマがひっくり返るほど大変な出来事だと感じています。教育委員会に諮ってこのテーマを決めたわけですが、そこを見直すというのも1つの手なのかなとは思っています。

確かに竹高委員がおっしゃるように、I O Cのバッハ会長は「やりますよ」と。国も東京都も、J O Cも、組織委員会も「やりますよ」という話はしていますが、果たして今の状況の中で各国が選手を派遣してくるのかという懸念もあります。これから流行っていくだろうアフリカのほうの選手が来られるのかどうか。アフリカなしのオリンピックなんか考えられない、どこかが抜けているようなオリンピックなんて考えられないと私は思いますので、そうなったときに、オリンピックというテーマではなくて、オリンピックを1つの題材として、コロナでオリンピックがこうなってしまった、その中でコロナというのは、この生涯学習、教育全体なのですけれども、生活も含めて、ここに大島議長が書いてくださったようなことをまとめるのも1つの役割としてあってもいいのではないかと、私は今思っています。

皆様の総意で、テーマを変えましょう、と仮になった場合でも、社会教育委員でコロナ禍を体験したのは今のところ皆様方しかいなくて、それをテーマにするなら、引き続き皆様方の知恵、アイデアを出しながら、掘り下げていって1つの提言にまとめていくのがベストだろうと思っています。

○竹高委員 「『東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会』を契機とした文化の創造と継承について」というテーマだと、ほかの部分の話が、コロナの話も含めて、とてもしづらいと思うのですね。ただ、やはり去年から皆さんと一緒に勉強させていただいたこともきちんと盛り込んでいくべきですし、オリンピック・パラリンピックというの、東京に2回目に来るわけで、それを踏まえて勉強してきたことがあるので、それもちょうんと入るような形のテーマ、名前の修正じゃないですけれども、そういう形にしたほうがいろいろな方向に議論も伸びやすく、全部踏まえたところで、オリンピックができてできなくても、やはりスポーツも文化も生涯学習も全て、社会教育含めたところでどう変わってきたのか、これからどうあるべきなのかみたいなことがまとめることができたらいいなかなと。

ただ、そうすると提言という形ではなくなってしまうかなとは思いますが。あと2年でそれを「こうあるべきだ」と言うことは多分できないので、こういうふうになってきたけれども柔軟性を持って動いていくのがいいかもしれないというような形の言葉にしかまとめられないのかなと思いますね。

○大島議長 とても大事なご発言でした。

○長峰委員 1つ素朴な質問なのですが、12期は12期で、1冊の提言にまとめなければならないのですか。

○生涯学習課長 今期は12期ですけれども、テーマがテーマなので、そのテーマを仮に変えたとしても、議論する時間が短いので、まとめることは不可能だと思います。

○長峰委員 次の期にほぼ全部を持っていくというような形でよろしいのですか。

○生涯学習課長 そうです。

○大島議長 継続するということですね。

○生涯学習課長 はい。今、竹高委員もおっしゃったように提言書としてまとめなくても、例えばこういう議論をしたというまとめのようなものでもいいのかなと思います。このコロナの中で、コロナに対する提言なんていうのは、少し難しいのかなと。2年後、まだ現在進行形かもしれないし、終わっちゃっているかもしれないし。仮に終わったとしても、そんなに年月はたっていないでしょうから、難しいのかなと。

○大島議長 あらゆる暮らし全般を見ることができていたわけではないからこそ、このオリンピック・パラリンピックというのぞき窓からスタートしていた、ということを手放す必要はないと思っています。そこから見ているうちにいろいろな変化が起きてきたということ、その時点時点で確認しつつあるわけだから、そのルート経過、実況中継のようなことをきちんとやって、オリンピックがあるかないかという時点を越えたところで、ここまでの移り変わりというのはこうでしたと報告する形じゃないかな。その報告に至るまでに、思うところが湧いてくれば、提案や要求のような、やるぞっていう話が出てくるかもしれない。それまでは、1つのテーマを持って経過を観察し続ける、共有し続けるということは、きっとここでやっていけることだと思いましたね。

○生涯学習課長 あとは、緊急事態宣言中、何か行動ができたかという点。前回もあったように「何でできなかったんだろう」ということもあろうかと思いますが、その時期にできることをまとめることはできるのかなと。緊急事態宣言が発出されている間に、地域、行政、それから法制、いろいろな関係の方々が「何ができるだろう」、「誰に対して何ができるだろう」ということを議論するのも1つの手かだと思います。緊急事態宣言は今終わっているのですが、その間のことは反省できると思うのですね。経験として。これからのことは、もう皆目見当がつかないです。

○竹高委員 その反省も、人によっていろいろな意見があり、それを文章にまとめるのは、大変

なことじゃないかなと思います。1つの意見に対して、肯定も否定もものすごく意見が出てくると思うので、それを社会教育委員としてまとめるというのはすごく大変だなと思いますね。

○生涯学習課長 まとめないにしても、これは仮の話ですけれども、それをテーマに意見を交換していく、そのただ記録だけというだけでも1つの成果だと思います。

○大島議長 まさに、まとめるかどうかというところは、必ずまとめるぞっていうふうにはやらなくてもいいのではないかということ、1回共有したほうがいいのかもかもしれませんね。

○竹高委員 そうですね。結果まとまるかどうか、ということでもいいと思うのですが、ただ、やっぱり軸となるものは皆さんで共有して意見を出し合ってまとめておかないと、今年の今期もきちんとまとまらないし、次期もやるとなっても話がぶれると逸れていってしまうので、やっぱり求めるところはどこなんだという話は、ぶれないほうがいいと思うのです。

実際にコロナの影響について話をし始めたら切りがないほどいろいろな情報もあるでしょうし、話はたくさんできると思うのですが、「全般」になりすぎてしまうと、まとまりがないただの雑談になってしまうかなとも思うので。

○大島議長 前回の会議資料を詳細まで見たわけではないのですが、やはり宣言が出ていた間の、止まっていたという記録だけでも非常に意味があると思いました。予定どおり動いていたなら、そこまで目を留めて見られたかどうか。止まったことによって非常に目につくわけです。でも、時間がたつと「あ、回復したね」と、またどこかに消えてしまってそれっきり。どう記録を整理していくかということだけでも、とても大事な仕事なのかなという気がします。

○野川副議長 前回やったことがやっぱり今回の核になりつつあると思います。スポーツ・文化活動や社会教育活動にどのような影響が出て、そして優先順位がどうつけられていったとかということ、もう1回きちんと見て、あの判断が本当に葛飾区民にとって一番有益だったのかどうかというようなことを検証できないかもしれませんが、やはりそれをチェックすることはできるんじゃないかと思います。

オリンピックは「中止」とは言わないで、必ず「延期」という言い方をしている。1916年は第1次世界対戦があって、ベルリンでやるはずだったものができなくて、それが36年に移る。その次、今度東京でやると決まっていた1940年のものがやはりできなくて、それが64年に来たわけではないのですが、その代わりにイギリスで48年にやるという形になったわけですね。やはり戦争があるとインフラが壊されてしまって、そこから立ち直るのが大変なんですけど、今回の場合、インフラに対する影響はほとんどありませんから、あと何に影響があったのかということでは、感染症という非常に厄介なものが流行したとき、オリンピックを筆頭にいろいろなスポーツイベントが軒並み全部駄目になって、そうすると市民・区民は何を求めるのか。娯楽としてやはり求めるものなのか、健康づくりとして、あるいは仲間づくりとして求めるというところに、スポーツ・文化活動や社会教育活動の原点を、もう1回見るよいチャンスではないかと思う

のです。

そういう観点でもう1回見ていくのであれば、トランプさんが言うように、コロナがサッと霧のように消えるのであれば全部元に戻ると思うのですが、多分いつときには戻らないで、また順位付けが出てくるだろう。その優先順位は、何を元にして考えるべきなのかというところで、やはり行政としては非常に大きな課題を突きつけられると思います。我々社会教育委員は行政ではありませんから、こういうものが必要だということを、論理的に優先順位をきちんと言えなければならない。それを考えるというだけでも非常に今回はいいチャンスです。だから、まとめるところまで行くかどうか分かりませんが、そういう視点ではないのかなという感じがします。

○大島議長 「元に戻る」に似た言葉で、地震のときは「復興」という言葉を使いましたが、その前に、僕らの生活の「復旧」でいいのかという問いだと思うのですよね。変わったほうがよかったという話が出ている部分もあるわけですよね。「そんなにムキになって職場に遅くまでいないでよ」という部分は変わってきているわけで、変化というものを丁寧に跡付ける中で、勝手に社会教育のほうに引き付けるとすれば、会社にそんな長くいないなら、もっと地元で楽しみませんかというところにもつながる。そう考えるとチャンスにもとれる、ということを短い論理でポンポンと述べるのではなくて、そういう大きな変化を丁寧に跡付けた上で言えたら、より文化やスポーツが大事なんだということが、心の底から言えるようになると思うのです。

○野川副議長 社会資源になると思うのですが、公園もスポーツ施設も図書館もいろいろなところが全部閉められてしまったときに、我々はどういう生活をしたらいいのかということで、地域住民が本当に自分の地域でいろいろなことをやらざるを得なくなってきたからこそ、テレワークがこれから続いていけば、わざわざ出勤しなくてもいいわけで、そうするともっと顔の見える地域社会ができると思います。地域連帯とか、70年代に言われていたコミュニティ・モラルとかいう地域の凝集性みたいなものを、ある意味、どうしてもせざるを得なくなってくることを考えていくと、その中で凝集性のあるコンテンツは何かというと、多分、社会教育の1つで、スポーツや音楽、あるいは踊りといったコンテンツをどの程度上手に設定できて提供できるかというのが、すごく必要になるのではないかと思います。

高齢者が増えますから、みんな行動範囲がそれほど広くないわけです。そうすると、本当にそれぞれの地域での凝集性が、これからより必要になるので、そういう意味で、社会教育はどう位置付けたらいいのかという話ができると思います。

○大島議長 大人も子どもも地元にいるという変化の中で、何が変わっていくかといったところはありますか。

○長峰委員 私の地元、亀有では、長年行ってきた亀有まつりも中止になっていますし、それ以外のイベントもいろいろと中止になってしまったので、地元人がいても参加するものがあまりないという問題もあるかなと思うのです。

○野川副議長 オンライン祭りでしょうか。

○竹高委員 オンラインは、高齢で単身住まわられている方など、できない方はできないですよ。オンラインで済むものって、そういうことが好きな方にとってはいいかもしれませんが、やはり限りがあると思うのです。だからといって、やはり緊急事態宣言から2カ月くらいは公園のジャングルジム等も使えないようになっていて、あれはどうなのかなと思いました。今はそんなこと一切ないですよ。でも、最初は「みんな自粛」ということで、ああいう形になって。小さい子どもが家の中にいて外に遊びに行けない。どれだけ保護者の方は大変だったかと思えますね。

そこで、専門家の方たちがここまでは大丈夫だというライン引きを、もっときっちり発信してくださるべきだったのではと思います。今の時点ではこうなっているから、と2カ月間もジャングルジムにテープを貼るようなことはせず、やはり最初の1カ月で何とか解消しようという形にしないと、子育て世代の方たちは非常にきつかったらうと本当に思います。子どもたちもゲームには飽きてしまうので、学校に来られたときの子どもたちの嬉しそうな顔といったらなかつた。やはりそう考えると、オンラインが普及して音楽やお芝居がオンラインでも楽しめる時代になっても、それでは限りがあるということに対して、社会がどうあるべきなのかという答えが見つかるといいのになと、専門家がもっと考えてくださらないかなと思います。

○鈴木委員 初めてのことなので、あまりにも怖がり過ぎてしまった。公園のジャングルジムやブランコも、ちゃんと消毒して乗れば大丈夫だったはずなのに、少しやり過ぎだった感じはありますよね。

○竹高委員 これからの担い手である子どもたちを守ろうという意識が強かったのはいいことだと思いますが、そのせいでストレスを抱えた子どもたちもたくさんいるでしょうし、虐待が起きてしまったケースだってあるでしょうし。

○鈴木委員 お父さんもお母さんも家にいたわけですから。

○竹高委員 そうです。そうすると、夫婦喧嘩も増えてコロナ離婚とかもしますし。これが最後ではないですし、最初だったかもしれないけれども、またこの先にどういうことが起きるかは、社会全体で分からないので。だとすれば、その中で、トラブルが起きたとき周りはどういうふうにしていけるのだろうかという方向性が見えるといいのかなとは思えますね。

○鈴木委員 コロナを怖がり過ぎてしまって、神経質な人が家から出られなくなって会社に通えなくなったという話を聞きました。会社もまともな仕事ができないし、今ならテレワークがありますが、まだテレワークが進んでいない最初の頃、でも怖くて出られませんという人がいると聞いて、やはり気にする人はすごく気にして、空気感染するんじゃないかという感じだったので、もう少し何かいいアドバイスがあればよかったですよね。

○大島議長 2段階の学びというか、受け止め方を分けて考える必要があると思います。自分がある情報を得て「どうだろう」と判断することと、もう1つ、学校は典型だと思いますが、情報

を信じるものとして適応していく人がいっぱいいるわけです。子どもたちや先生方に「こういうふうにしていきますよ」という、そのお墨付きを誰かが付けないことには何もやっていけない。あらゆることに対して誰の判断を適用しなさいというのは、学校には何か指示はあったのですか。

○熊谷委員 基本的には、現状、未知のウイルスであることは変わっていないと思っています。全貌が分かったわけでもなく、何をすれば防げるかが分かっているわけでもなく、もちろんワクチンができていないわけでもない、薬ができていないという状況は最初と変わっていません。それで、ある人はこんなことを言い、違う人は別のことを言っている。昨日も出ていましたが、マスクで50%防げるということが分かった。その50%を大きいと見るのか、小さいと見るのかということも個人の考え方によって随分違うんだらうなど。価値観がみんなバラバラなので、保護者の方々も、「うちの子は学校に行かせません」というケースもあるし、「いや学校を開けてもらわないと困ります」という方もいます。いろいろな事情を抱えている現状の中で、我々が動いている根拠、裏付けは行政ですね。やはり教育委員会や保健所の判断という形で動いていかないと、我々には裏付けがないのですよ。校長の判断で動けるレベルの話ではないので、その辺は専門家の判断を根拠として動かないと、学校単位で動ける部分というのは、今回の件に関しては非常に少ないと思っています。

○大島議長 このことは、非常に鮮明に出ていますよね。何に拠って立って行動するのか。自分で考えなさいと言うけれど、拠って立つものが違えば、やはり要求がずれていくというのが、ものすごく鮮やかに出てきていると思います。

個人的なところでも、スタートの頃は、もしかしたら持病の中でも喘息が罹りやすいというのがあって、僕自身非常に気を使いましたが、自分がどういう立ち位置なのかというだけでも物に対する評価は変わってきてしまう。でも、そういう人たちはいろいろな人たちと同時にいる場所では、調整をつけていかなければいけない。社会教育の場であれば、「わざわざ」という言い方はあれですが、わざわざ人を求めて集めるわけですから。当然価値観が違う中で、1つのことを「これでいきましょう」と進めていく、そういう葛藤の中に立たされてしまうなというのを改めて感じますね。

○鈴木委員 今、大学ではどういうふうなのですか。

○大島議長 僕の職場は、後期からは、わずかですが対面の授業を取り入れることになりました。それでも、同時にキャンパス内に在籍できる人数を面積で割り出して、そのマックスを超えない人数だけがその瞬間にいるという配分なのですね。2つのキャンパスで定員は全部で1万人ぐらいなのですが、それでも同時に入れるのは本当にわずかな人数になります。

○鈴木委員 勉強しているときは、うつらないと思うのですね。くっつきませんし。その後の自由なときに、くっついたり食べたり飲んだりして感染するわけだから、ちゃんとすぐ帰ってくれば大丈夫そんな感じがしますけれどね。

○大島議長 それが、またいろいろな言い方が出ていますけれど、大学生の行動範囲が広いからということだったり、中学校も動きますけれど、それ以上に授業で学生同士の組み合わせがどんどん変わっていくということもあつたりします。濃厚接触者の話がありましたが、圧倒的な広がりをつくってしまうということで、現実的にも感染者は出ていますので。でも、ほぼ授業をしていないものですから、大学そのものが止まるという事態には今なっていないんです。

○鈴木委員 どこで感染したか分からないから怖いですよ。学校ではなくて、その後カラオケなどに行って感染するケースもあると思いますが、分からないというのが、やはり怖いです。

○大島議長 さっきの話ですね、本当に。

○竹高委員 家から出ないで、コンビニしか行っていない人が陽性だったという話もあるので、そもそも免疫力が低下しているところだったら、どこで何をしたってうつってしまっている可能性もあるでしょうし、そこがはっきりしないと、石橋を叩きながら、いろいろなことをしていくしかない。でも、イベントもいろいろやり始められていますけれども、そこで何もなければいいなど、会議も含めて思っています。区民大学も募集をかけるとすぐ満杯になるみたいですし、講演会などもやはり需要があるので、計画を進めて年明けにはと思っている企画もあるのですが、本当に大丈夫かなと思いつつ、企画側としては区民の方にご迷惑をかけてもいけないし、もちろん区民大学のほうにも迷惑かけてもいけないしと思って動いています。

小学校の「わくチャレ」も2学期は諦めて、それでもやはり初めて入ってきた子が今年度一度も行かないのはかわいそうだから、何とか3学期に向けてと思って。

遊べるものも、バスケットボールはパスだけとか、バドミントンは離れているからやっていいとか、そういう感じなのです。子どもたちはもう走り回っているから、始まってしまえば、もうセーブは効かないと思うのですが。

○野川副議長 柔道や相撲、レスリングは大変です。ラグビーはスクラム組むでしょう。大変ですよ。柔道連盟などの人たちは大変困っていて、海外からの選手と試合するとなると、1～2週間隔離して、最初に危なくないかチェックしてから試合させるわけですが、その1週間分の宿泊費などは全部柔道連盟が出すとなると、お金も出せないという話です。

ラグビーも、それこそスクラムはもうやめてしまおうかということは、誰も言ってないですが、ルールを変えればゲームはできるわけです。

スポーツはルールをどう変えていくかですから。サッカーではゴールキーパーにバックパスをしてはいけないとなつてから、ゴールキーパーがやるべきことは全然変わってしまうわけですよ。ですから、ルールを変えていけばいいと思います。スポーツをやりながら新型コロナにうつった人が何人いるのかデータが出てこないから分からないですね。何処の区で何人、新規の感染者がいましたと言っても、その人たちがどういう人なのか一切分からない。

夜の仕事をしている人たちの中でも、国籍によって違うのではという意見もありますが、そ

ういう情報が全く分からないでしょう。だから、濃厚接触者になったときに、どうしたらいいのかも分からないので大変ですね。

○長峰委員 検査で陰性でも、次の日には感染しているかもしれないじゃないですか。ワクチンなどがしっかり開発されなければ、そういう心配はずっと続くわけですよ。

○野川副議長 今回、ワクチンを接種して、もしも何らかの副作用で大変なことになった場合には、国が面倒見ることになっているのですね。そんなことあり得るのかなと思いますが、そうやってもう言ってしまっています。2億回分を買うというような契約も済ませていると言いながら、今は開発がストップしているでしょう。ジョンソン・エンド・ジョンソンもストップしていますし、日本で効かなかったらどうするのか。

○長峰委員 海外と型が違うとかいう話もありますね。

○野川副議長 山中教授に言わせると、日本人はファクターXで、BCG接種などをやっているから罹りづらいかもしれないということですが、これは大体2カ月ぐらい前、NHKで放送しましたよね。その後一切テレビに出ませんね。うがった見方ですが、あれは製薬会社からストップがかかっているのではないのでしょうか。SARSやMARSでもそうでしたが、コロナが出た瞬間、ワクチン開発ということで製薬会社がすごい戦争をするわけです。今、製薬会社で1兆円産業になるのは、前はエイズ、最近では認知症、そして次のものがない中で、今回のコロナはビッグビジネスですよ。ですから、いろいろなデータがあってもわざと我々に教えてくれないのではないかと思ったりします。うがった見方ですが。

逆に、ワクチンを接種すれば何とかなると信じていいのかな。SARSのとき大変だったんです。私が学部長のとき、バイトをしていた学生が3人ぐらいSARSに罹ったと言われて、キャンパスの中の600人の学生を隔離するかどうかで、ブルーの防護服だったと思いますが教職員は全員身につけることを想定しました。1着2万幾らかするそうで、1回ごとに替えるとなったら大変です。それを揃えて、食事も隔離して食べることになったのです。ところが、あれも2カ月ちょっとで収束したので、今回も必ず季節性になるはずだという説があります。その説を取ると、できるだけ何もせず、みんな抗体ができるまで待とうということになります。

○大島議長 でも興味深いのは、今回のコロナへの対応の中で、結果的にインフルの感染が減った。それは行動変容が起きたわけですよ。

○野川副議長 まだインフルの時期ではないから、分かりませんよ。

○大島議長 今度の冬がその確認になるのでしょうかけれど、インフルの感染が抑えられたと見るならば、行動が変わった、きちんと多くの人に新たな学習がなされたという見方もできるのかな。ただ、それは今度のこのコロナに対する学習というものもあり得る。何が正しいかということと並行ですが、そういうものは、国や自治体は1人の人間に「こうしなさい」、「これが正しいのです」ということを、どこまで強制していけるのかという問いにつながるのかなと思って。

でも、結果として、自分の命を守ろうと思ってうがい手洗いをしたことが、インフルに効いたのかもしれないし。まだ分からないけれど、押しなべて全ての人に知っていてほしい、取ってほしい行動を誰がどう要求できるのかというような、非常に大きい話があるのかなと思います。

○竹高委員 中学生は「やれ」って言うと、うがい手洗いをちゃんとやるんですか。

○熊谷委員 やりますよ。命がけですから。

○竹高委員 どちらかというとな面倒臭がって中学生はやらないかと思いました。

○熊谷委員 やらせなければいけないし、1人の問題ではなく、周りとの兼ね合いですからマスクもさせています。マスクをしたくない気持ちは本当に分かるのだけれど、でもあなただけの問題じゃなくなるからね、という形でしています。

○竹高委員 小学生は、マスク外している子がいたりします。

○熊谷委員 低学年のほうが難しいのです。

○竹高委員 そう、難しいです。下に落ちてしまったのも平気でつけますし。でも、そのことで周りにうつすかもしれないという話をする、やはり分かって、何回か注意しているうちにきちんとするようになるのですけれども、マスクは本当に厳しいですよ。ただ、手洗いは低学年でも、みんなで順番に、廊下に立つ位置も決めて、やっています。給食でも机を離すなど、小さいうちから、コロナが収まってもそういう習慣をつけておけばいいと思います。大人になっても習慣で、手を洗う、うがいをするのが当たり前になっていれば、こういうことがまた先に起きたとしてもちょっとは違うのでは。

日本人はきれい好きなので、こうしたほうがいいかもしれないという流れがあると、みんな右向け右でやるので、収まり方が早いじゃないですか。静かにしていなさいと言ったら静かにしているし。ニュースを見ているとヨーロッパの人たちは全くマスクをしていませんよね。あれだけの状況なのに、マスクをしないで出歩いているのは、すごいなと思います。

○鈴木委員 今頃フランスなどは、すごいことになっていますよね。

○竹高委員 そうですよ。あれは見ててすごかったですね。さすがに中国もちゃんとやりますからね。

○大島議長 言われたことを理解したということと、行動というのは、イコールにはつながらないですね。横断歩道で信号がないところで、僕はいつも轢かれそうになりますが、免許を取った人は、必ず止まることを、試験でも丸ももらっているはずですけど、絶対に止まらない人たちがいたりして。だから頭で分かっていることと行動とがずれているということは非常に課題、でも決して強制できないのではないかな。学校と、学校の外側の大人たちの新しい習慣を広げていくというのは、ものすごく大きなテーマかな。子どものうちからという、先ほどの考え方が生き方そのものになるというところまで行けば。

広げ過ぎると、この先どうしたらいいかというのが難しくなるので、今お話をずっと伺って

きたところのストーリーを整理しなければいけないと思いました。やみくもにずっとお話を続けていても、放談会みたいになってしまうので、これまでのお話を踏まえて、どういう部分をきちんと検証するのか、事実を持ち寄るのか、ということを重ねていくと、この間の僕らの経験が1つのまとまりをもって、報告として残しておくまでにできるのだというストーリーを用意したらいいのかなと思いました。

○生涯学習課長 そのきっかけになるか分かりませんが、この事態になって、スポーツ施設も、図書館も、閉館しました。そのきっかけは学校の授業です。総理大臣が休業要請を出して学校を休業した。学校がやっていないなら、こちらは何もできないというのが判断基準。学校がゴールデンウィーク明けに再開するというので、それならうちもできるね、となりました。細々とした基準はあり、学校はフルスペックでも博物館はフルスペックにできないということもあるのですが、学校が1つの基準になるのです。

○大島議長 そういう1つ1つの参照関係を明らかにしておくことは大事だと思いますよね。何かの事態がこれから来たとしても。そこには時差があまりなかったわけですね。

○生涯学習課長 ほぼないです。

○大島議長 それだけ学校という仕組みのあり方が波及するのですね。

○生涯学習課長 影響は大きいですね。特に我々、同じ教育委員会なので。

○竹高委員 教育委員会の管轄下の施設の一部が休みになれば、全部停止のような形にはなりませんよね。

○生涯学習課長 なりますね。例えば、学校もスポーツ施設も図書館もやっていないのに、なぜ博物館だけできるのとなったとき、その答えがないのです。

○大島議長 葛飾には、コミセンはあるんですけど。

○生涯学習課長 あります。

○大島議長 教育委員会の外側のコミセン。そちらは動いていたのですか。

○生涯学習課長 いや、止めました。

○大島議長 それはどういう根拠ですか。

○生涯学習課長 区長部局なのでよく分かりませんが、恐らく学校の休業と同時です。

○大島議長 そのあたりを丁寧に見ておくといいですね。地域での活動はコミセンでもできるわけですし、開いているところを使ってできてしまうと、また社会教育施設側は「なぜこちらはできないのか」という話になる。

○生涯学習課長 博物館を休館したのは、学校が休みというのもありますが、学校が休みの間、博物館を開けておくと、どうしても子どもたちが来るんですよ。そうすると、少し違うかなと。スポーツセンターも児童館も図書館もそうだと思うのですが、結局、学校が閉じたときに、どんどん子どもたちの居場所がなくなっていく。家にいるしかないという悪循環になっていたと思

ます。

学校が休みだからといって、子どもたちの居場所づくりのために、学校よりも圧倒的に絶対数が少ない施設を開けたら、そこに子どもたちは集まってきますよね。そうすると、緊急時事態宣言中の、人を集めることがタブーになっている時期に、まして子どもが集まる場を作るというのは、もうこれはある種の「悪」になりますよね。だから公園も、接触感染という話もあるのでしょうけれど、遊具にクレームが付いて、ぐるぐる巻きにされてしまう。うちのマンションの前の公園も、何だか気の毒な遊具だと思ったりします。

○生涯スポーツ課長 今、集まるのが悪だという話がありましたが、生涯スポーツ課では河川敷にグラウンドを持っています。それで、やはり小学生が集まってその時期に河川敷で遊んでいたりと、「どうして小学生が集まって遊んでいるのだ」と苦情が入ってきたりもしました。いわゆる自粛警察と同じような考え方で、小学生が集まって遊んでいると「悪」という捉え方をする方もいらっしゃるのかなと思いました。

○大島議長 でも、それもその方にとっての正義なんですよ。

○生涯スポーツ課長 はい。人それぞれ考え方、どこに線を引くかというのが、やはり違うのでなかなか難しい問題だとは思いますが。

○熊谷委員 あの時期、実はずちの学校にも苦情の電話が入ったのです。3時ぐらいになると近くの公園に中学生が集まっているから何とかしろという電話でした。やはりあの時期は「家にいるために学校を休ませているんだろう。家で家にいさせないのだ」という観点で世の中の人は見ていると思っていたので、我々に言われても、申し訳ないけど我々の管理下ではないという思いはあるのですが、それでも教員をパトロールに行かせたりして対応したのは、あのときでした。

○大島議長 今のお話を伺っていて、大きなメディアでは語られない1個1個の取組を、1つの町のケースであればこそ丁寧に記録しておくことは必要だと思いますね。

○事務局 時系列的に、生涯学習課では、どのように事業を中止にして、どのように再開したかという資料を前回配付させていただきました。今、課長からあったように、博物館の臨時休館が3月からで、3月、4月の段階ではほぼ全部の事業が中止になっていますが、4月の段階で「7月からこの事業を始めよう」という動きが出てきているのです。それは、コミュニティ施設が4月、5月は完全に休館となっていて、6月から開いていくという中で、事業は7月頃から開始しようという動きになって、それでも全開ではないのですが、9月頃からは事業が再開されているという状況を時系列でまとめさせていただきました。

生涯学習課としては単独でやっている事業はあまり多くなくて、それこそ先ほどの区民大学の委員や、地域の団体、生涯スポーツ課もそうだと思いますが、いろいろな団体とタイアップして共催や協働でやっている事業がとても多いので、その団体の意向によって、また種目にもよりますが、始められそうな時期が事業ごとに一律ではないという状況があります。団体によっては

メンバーに高齢者が多かったりすると、リスクを考えて、なかなか始められないこともあります。事業ごとの問題もありますが、そういうわけで施設が6月から開いてきたので事業をやってきている。あとは、コロナの状況もあって、7月の終わりから8月にかけて急に東京都で感染者が増えたという状況で、9月ぐらいから全開にしようと思っていたところにストップがかかって、また考え直してとどまったりという流れが、この半年間でもいろいろあって、状況をまとめさせていただきました。

○大島議長 ありがとうございます。配付の資料は一通り目にさせていただいたのですが、まさに今のデータと、データをどう評価するかというコメントをくっつけていく作業を、皆さんの評価を踏まえてしていくと、後で読んでも意味が読み取れるものになると思いましたので、本当に基礎的なデータを作っていただいてありがたいです。

○生涯学習課長 補足しますと、緊急事態宣言中と、それが明けた後の7月、8月に感染者数が伸びている。1日当たりの感染者数というのは、それほど変わっていないはずなのです。それでも、私のところでも7月ぐらいから徐々に事業を再開していった、中止にしようという判断はなかったですね。こうすれば一定程度予防できるのだ、というのが分かってきて、それを最大限やれば、フルスペックではなくても事業ができるのだなど。だから中止にしようという判断はありませんでした。

今日の資料にもある「区民文化祭」を今やっているのですが、文化協会 17 団体と合唱というのがありまして、全部できているわけではないのですね。これもいろいろな団体の考え方があって、やりたいのだけれど、これまで稽古・練習ができていなかったからできない、というのと、できないけど、我々の生きがいなのでぜひやりたいというところに二極化していますね。やるけれど、一般の人は入れないで自分たちの発表会だけにするとか。この団体はどういうふうにするのかと聞かなければ分からないくらい、やり方は本当にいろいろです。

○大島議長 いろいろな工夫をしながら実施へというのが、今の大きな動きなのかなと思います。今日ようやく直接お声を聞けて、僕のほうは非常にありがたかったですけれども、皆さんは繰り返しになってしまったところもあるでしょうし、恐縮です。回を重ねるたびにいろいろな変化があって、追いつけるのか分かりませんが、議題の3「今後の会議の進め方」にも関わってくると思いますので、変化をきっちり片付けながらやっていくためのロードマップというのを次回、お出しできるようにしたいです。一旦今日の意見交換は締めくくらせていただきます。

3 今後の会議の進め方

○大島議長 それでは、3番の「今後の会議の進め方」については、まず事務局から説明をいただきます。

○事務局 それでは、資料3のスケジュール案をご覧くださいと思います。

1月以降の日程がまだ空欄でしたが、議長と副議長の間で調整した日程で、いかがかということを示してあります。1月27日、2月26日、3月24日の、全て午後2時から4時で、よろしければこの日程で進めさせていただきます。

今回は11月17日で、内容は提言の構成の検討まで行くかどうかはまた議長とご相談ですが、今日のお話をまた一段と深めていただくという形で予定しています。

12月25日は、教育委員との懇談を予定しております。懇談というのは、任期2年間の中で1回ぐらい、教育委員と社会教育について意見交換をしてはどうかということで、前期の社会教育委員から提案があつて始めたものです。本来ですと、そろそろ提言の骨子ができそうな頃なので、社会教育委員からその提言のご案内もするというので、11月、12月あたりで計画しておりました。今回は提言というところまでは行かないので、議長と相談しまして、今日お話ししたような新型コロナウイルスの状況の中で、社会教育、生涯スポーツといったものがどうなっているのか、意見交換ができればと思っています。前回、午後1時からと申し上げたのですが、午後1時半から教育委員会室で行いたいと考えています。このようなスケジュールでいかがでしょうか。

○大島議長 ありがとうございます。

4 教育委員との懇談会の進め方

○大島議長 教育委員との懇談では、教育委員会の皆さんが社会教育の領域についてどんな関心を持たれているのか、いないのかということも聞いてみたいですし、そんな機会になればと思います。先ほどのスケジュール案では、次回の内容が「提言の構成の検討」ということでしたが、先ほど申したとおり、提言という形を目標にする代わりに、しばらくどのようにウォッチしていくかのロードマップをお出しする形にさせていただければと思います。12月には、「これからこんなふうに関心に向けていきます」というテーマの話ができるのではないかと。

非常に大勢の方が教育委員会室に入ると、これは密な人数ではないでしょうか。大丈夫ですかね。事務局にお任せしますので、そちらはよろしくお願いします。

議題3、4までは、よろしいでしょうか。少しぼんやりしたところもあろうかと思いますが、よろしく願いいたします。

5 その他

○大島議長 それでは最後、5「その他」ということですが、委員の皆様から何かございますでしょうか。

○竹高委員 前回の提言で葛飾区の図書館のあり方についてまとめたのですが、それをまとめた際に前議長のほうからも、その提言に対して今回の社会教育委員にもきちんと見守ってほしいという話がありました。提言を踏まえて、葛飾区立図書館の基本的な考え方というのを図書館のほうでまとめていきますというお話もあったんですね。それがまとまっているのだろうかという心配もありまして、図書館のほうではその提言を受けて、どのような形で今、動いてくださっているのかということをお聞きしたいので、ぜひそのところを。今期はオリンピック・パラリンピック 2020 の効果の検証、そのテーマがなければ、社会教育委員のあり方や、今までまとめられた提言などを考え直すのがいいのではと私も思っていたのですが、とりあえず前回の図書館に関しての提言は、前議長からの申し送りもあるので、それを確認させていただいたら嬉しいです。

○大島議長 確認というのは、どんな場でお考えですか。

○竹高委員 社会教育委員の皆さんに、前期の提言書はお渡ししてあると思うのですが、そういう形でまとめたものが1年以上たったところで、どういう形で今図書館で動かれているのかというのを勉強するのもいいのかなど。図書館長に来ていただいてお話を伺うのもいいと思います。多分そういうことをやっていくことが、私たちが社会教育委員を終わった後に残したものに関して、次の方に考えていただくつながりになっていくのではないのでしょうか。やったらそれで終わりという形ではなくて、つなげていかなければならないと思うので。

○大島議長 それは今期が始まるときに大事な申し送りとしていただいたことですね。葛飾のスタイルとしては、テーマを立てて、そのテーマを中心に期間を設けてやっていくというスタイルだけれど、それより前のいろいろやってきたことを、同時にきちんと経過を踏まえてほしいという申し送りだったと思うので、まさにその進捗確認の機会をとということですね。

○竹高委員 結局今、足踏みをしているいろいろなことを模索する時期なので、ちょうどそういうことも踏まえたところで、この年度の区切りとして目を向けていくのもいいのではと思ひまして。皆さんがよろしければ。

○大島議長 そうすると、まず、前期からの引継ぎも踏まえて、図書館の状況も聞くようになるし、その後を考えると、例えば社会教育施設というシリーズや、博物館であったりの列挙のし方もできる。それでまたスポーツに戻ってくることもできると思うので。タイミングとかのご希望はありますか。

○竹高委員 それは全然、別に何もないので、そういう形で1期1期、見直していく時間も作っていただけたらなど。これから先のことも考えて。ですので、それは、懇談が終わって、来年1、2、3月の中でもいいですし、来月の打ち合わせのときに一部分、というのでもいいですし、その組み立てはお任せします。

○大島議長 分かりました。そうすると、来月はもしかするとロードマップで、そんなに長い時

間はかけず、こんなふうはこの先行けたらいいねということを経験するぐらいになるかもしれませんが、そこでまたご意見をいただくということで、いかがでしょう。今日お話ししてきて、検証ということとも重なっていくのかなと思いますし、はっきりと引き継ぎが見える対象でもあるので、図書館の状況を聞かせてもらうことをこの間に組み込んでいくということでもよろしいでしょうか。そうしたら、事務局とも相談して予定を考えてみます。ありがとうございました。

ほかに、ご報告などございますか。よろしいでしょうか。事務局からは何かございますか。

○事務局 前回も申し上げましたが、今度、博物館の展示が新しくなり、11月7日にリニューアルオープンします。議長には社会教育委員を代表して式典に出ていただくのですが、11月7日の11時15分以降は一般の方も新しい博物館に入れますので、ぜひ皆さんもお越しいただければと思います。

○大島議長 本日はこれで終了したいと思います。ありがとうございました。

— 閉会 —